

経済・金融 フラッシュ

最近の人民元と今後の展開 (2013年12月号)

経済研究部 上席研究員 三尾 幸吉郎

TEL:03-3512-1834 E-mail: mio@nli-research.co.jp

- 11月の人民元は、基準値は米国ドルに対して上昇したものの現物実勢はほぼ横ばいで推移した。世界通貨を見渡すと、米国のQE3縮小の時期は遠くないとの見方が優勢となって、新興国通貨の多くが下落、横ばいに留まった人民元は相対的にやや割高となった。
- 今月の人民元（現物実勢）は、米国経済は回復基調ながらも財政協議が山場を迎え、中国経済も回復基調だが景気指標の一部に陰りが見られることから、米中ともに長期金利の動意は乏しく、当面の人民元（現物実勢）は横ばい圏で推移すると予想している。但し、中国の防空識別圏をめぐる問題が人民元相場にも影響する可能性が浮上してきた。

[前月の動き]

11月の人民元相場は、基準値は米国ドルに対して上昇したものの、現物実勢はほぼ横ばい圏での推移となった。

基準値は4日に当月安値となる1米国ドル=6.1482元を付けた後、14日と20日には2005年7月の人民元切り上げ開始以降の最高値を更新した。その後はやや弱含みの展開となり、11月末は10月末より0.2%元高・ドル安となる同6.1325元で終えた。また、許容変動幅（基準値±1%）の範囲内で市場メカニズムによって動く現物実勢は、1米国ドル=6.09元台での小動きに終始、11月末は10月末とほぼ同じ同6.0931元（スポット・オファー、中国外国為替貿易センター）で終えた。

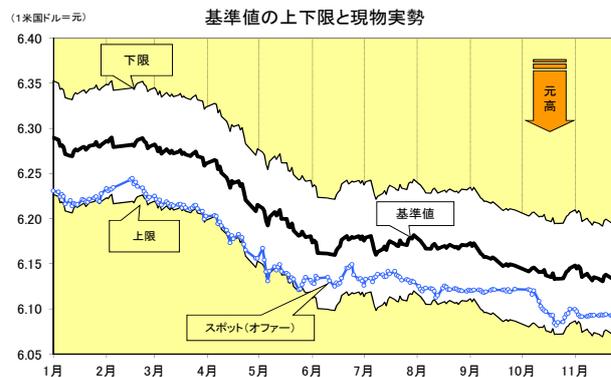
その結果、11月は現物実勢が基準値に少し近づき、両者の乖離幅は10月末の0.8%から11月末には0.6%まで縮小している（図表-1、2）。

(図表-1) 人民元相場 (対米国ドル)

	基準値			備考 05年7月以降	現物実勢			備考 05年7月以降
	前日比	(注)			オファー	ビッド	(注)	
10月末	6.1425	-	-		6.0950	6.0945	-	
11月1日	6.1452	▲0.0027			6.0997	6.0991	(当月安値)	
11月4日	6.1482	▲0.0030	(当月安値)		6.0995	6.0991		
11月5日	6.1447	▲0.0035			6.0971	6.0966		
11月6日	6.1475	▲0.0028			6.0933	6.0930		
11月7日	6.1450	▲0.0025			6.0915	6.0910		
11月8日	6.1355	▲0.0095			6.0913	6.0904	(当月高値)	
11月11日	6.1390	▲0.0035			6.0917	6.0913		
11月12日	6.1360	▲0.0030			6.0920	6.0918		
11月13日	6.1342	▲0.0018			6.0930	6.0912		
11月14日	6.1315	▲0.0027		最高値	6.0927	6.0921		
11月15日	6.1351	▲0.0036			6.0930	6.0912		
11月18日	6.1332	▲0.0019			6.0924	6.0924		
11月19日	6.1317	▲0.0015			6.0935	6.0924		
11月20日	6.1305	▲0.0012	(当月高値)	最高値	6.0930	6.0925		
11月21日	6.1366	▲0.0061			6.0932	6.0926		
11月22日	6.1380	▲0.0014			6.0938	6.0935		
11月25日	6.1342	▲0.0038			6.0927	6.0924		
11月26日	6.1357	▲0.0015			6.0927	6.0925		
11月27日	6.1330	▲0.0027			6.0926	6.0924		
11月28日	6.1343	▲0.0013			6.0923	6.0921		
11月29日	6.1325	▲0.0018			6.0931	6.0928		

(資料) CEIC(中国外国為替貿易センター)

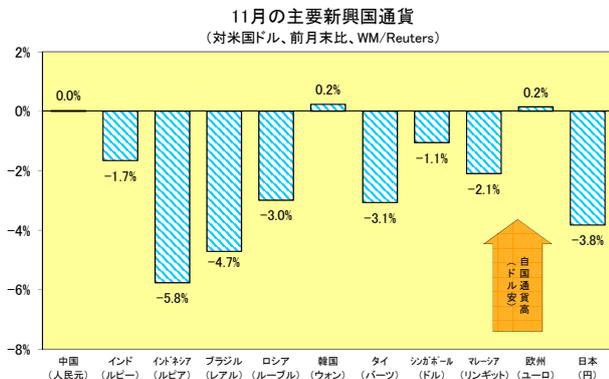
(図表-2)



(資料) CEIC(中国外国為替貿易センター)のデータを元にニッセイ基礎研究所で作成

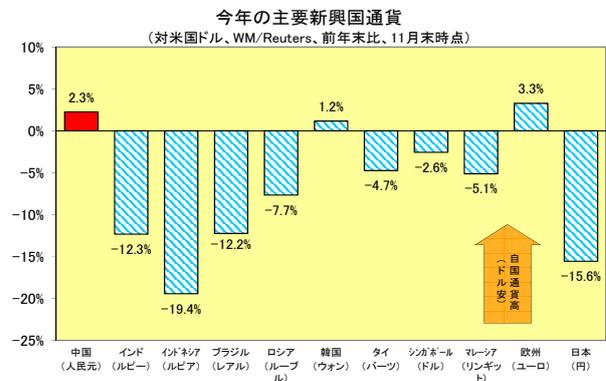
一方、11月の世界通貨の動きを見ると、米国のQE3縮小の時期はそれほど遠くないとの見方が優勢となって、インドネシアルピアが前月末比5.8%下落、ブラジルレアルが同4.7%下落するなど値を下げた新興国通貨が多かった(図表-3)。その結果、横ばいだった人民元は韓国ウォンと並んで相対的にやや割高となった。今年通期で見るとその傾向はより一層顕著である(図表-4)。

(図表-3)



(資料) Datastreamのデータを元にニッセイ基礎研究所で作成

(図表-4)



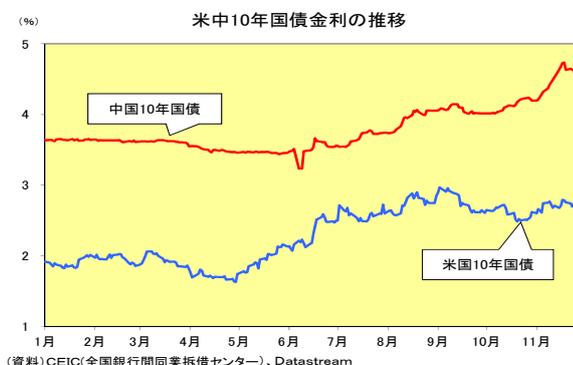
(資料) Datastreamのデータを元にニッセイ基礎研究所で作成

[今後の展開]

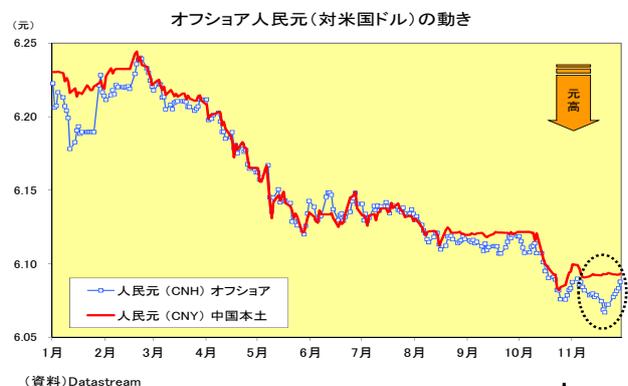
さて、米中の経済状況を見ると、米国経済は回復基調を維持しているものの、今月は再び財政協議が山場を迎えることから長期金利が大幅上昇するにはまだ早い。一方、中国経済も回復基調だが、製造業PMIの一部に陰りが見え始めている。従って、米中ともに長期金利の動意は乏しく、当面の人民元(現物実勢)は横ばい圏で推移すると予想している(図表-5)。

但し、中国の防空識別圏(ADIZ)をめぐる問題が人民元相場にも影響する可能性がでてきた。前月の人民元オフショア市場(CNH)では、15日に公表された3中全会の決定文が人民元改革に前向きだったことから人民元が大幅に上昇した。しかし、中国が防空識別圏を設定すると、地政学的リスクが高まり、CNHは急速に値を戻した(図表-6)。尖閣をめぐる日中の対立は、米国や韓国を巻き込んだ新たな対立構造へ変化する可能性もあり、当面の波乱材料といえそうだ。

(図表-5)



(図表-6)



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。